

広げよう・深めよう、 子どもとの対話

アンケート集計結果と考察

<お断り> 1998年度、息子たちが在学する I 市立 T 中学校
PTAで広報委員をやっていたわたしは、親子アンケートの
質問をつくり、その結果を分析した。7月発行のPTA広報
には紙幅の関係で分析全文を載せることが出来なかったので、
ここに掲載することとした。

はじめに

中学生の殺傷事件がセンセーショナルに報道されて以来、「子どもを甘やかしてはならない」という主張の一方で「大人は子どもの心をもっと理解すべきだ」という主張もなされている。一見相反するようだが、折り合うことはできる。きびしく対応するにしても、まずは子どもの心を知らなければ、的外れの対応になってしまうからである。

そこで、親子の相互理解をめざす企画として、中学生とその保護者にアンケートを実施した。回収率は[表1]のとおりで、93.8%。この数字は「自分たちの気持ちをわかってほしい」という希望の強さを示しているのかも知れない(もちろん回収の際の先生方のご尽力もありました)。

[表1] 回収率

	提出数	在籍数	回収率
生徒	165	176	93.8%
父	153	世帯数	(86.9%)
母	158	154	(87.8%)

また保護者の方も、世帯数が154のところ、父153枚、母158枚の回答があった。複数の子供が在学している家庭では、子どもの数に合わせて回答して下さったのだろう。父親の回答も、母親と遜色がなかった。みなさんのご協力に感謝します。

子育ての意識

子どもの問題が表面化すると、家庭の責任が問われることが多い。これまでは、母親を批判する論調が多かったが、昨今は、「男は家族から逃げて職場にへばりつくな」といわれるようにもなった(もっともこれですべてが解決するとは思えないが...)。また、毎日新聞世論調査によれば、「人生をやり直すことができてもいまの夫とは結婚しない、あるいはしないだろう」と答えた既婚女性が36%おり、その理由として「夫は家事や子育てに協力的でないから」と答えた人が24%にもものぼっている(98年5月14日)。「子どものことは母親に任せてある」なんて言っていられない時代になっている。

1 <生徒>あなたには、友人は何人くらいいますか。

<保護者>あなたは、お子さんの友人の名前を何人くらいご存じですか。

生徒は「友人」を親友ではなく、遊び友達と受けとめたようだ。

現代の子どもたちは友人関係が稀薄であるといわれる。休み時間の教室はにぎやかだ

が、それを「とにかく喋っていなければ維持できない危うい友人関係」とする分析がある。喋っていないと不安で仕方がないということのようだ。他方で家に遊びに来る子どもたちは、話をするより、黙々とゲームをし、コミックを読む。いわゆる会話がない。これを沈黙に耐えられる信頼関係と受けとめて良いのだろうか。生徒の友人関係、濃密・稀薄のどちらなのだろうか。子どもの友人の名前は、父親も予想以上に知っていた。

[表2] 友人の数 (人数)

	生徒	父	母
0人	1	2	0
1~2人	2	20	4
3~4人	9	50	23
5人以上	142	58	125

2 <生徒>この四月以降、保護者に叱られたことがありますか。
<保護者>この四月以降、お子さんを叱ったことがありますか。

[表3] 叱られた生徒・叱った親(人数)

	生徒	父	母
ある	97(59%)	98(64%)	119(75%)
ない	46(28%)	53(35%)	37(23%)

「叱る」は「怒る」よりは感情的でなく、諭す意味も含めて使った。

親子がピッタリ対応しているわけではないが、叱った母は119人いるのに、叱られた子どもは97人。22人の子どもは、叱られたと受けとめていない。

なぜだろう。22名という数字が多いか少ないかは一概には言えないが、子どもは叱られることになれているのではないだろうか。とすると、効果のある叱り方を考える必要がある。叱るパターンの中では、父が娘を叱る数字が一番少なかった印象がある。

3 <共通>何にムカつきますか。

子どもたちは、自分の思い通りにことが運ばなかった場合のイラだちを「ムカつく」と表現している。そのムカつきの中味を問うことで、子どもの心を探ってみた。なお、前問では「叱る」を使い、ここでは「注意」という語句を使っており、一貫性に欠ける。これは、叱るよりも基準をゆるめることで、回答数を増やそうとした。数の多い方が傾向がはっきりするからである。

また保護者にも同じ質問をし、「子どもの立場に身を置いて」答えてもらった。わが子の立場に立って考えた方も、自分が子どもだったらと考えた方もいた。

(1) どのような内容の注意にムカつきましたか。三つ選んでください。

**勉強・成績がトップ、
部屋や持ち物、他人との比較、欠点分析が続く**

[表4] 注意の内容

勉強・成績は、最初に置いたこともあってもっと大きな値が出る
と予想した。「良い学校 良い就職
= 安定した生活」という方程式が崩
れそうな時代の影響だろうか。生涯
学習が取りざたされる時、何のために勉強するのか、中学生の勉強は人生においてどんな意味があるのかななどを、考えてみるのもよいだろう。

	生徒	父	母
勉強や成績のこと	97	84	93
交友関係(友人のこと・帰宅時間など)	27	44	42
お金の遣い方	38	36	36
友人や兄弟姉妹と比べられること	63	56	69
欠点を分析されること	50	71	70
頭髪・服装・装飾品などの外見	36	26	42
部屋の整頓や持ち物のこと	68	53	65

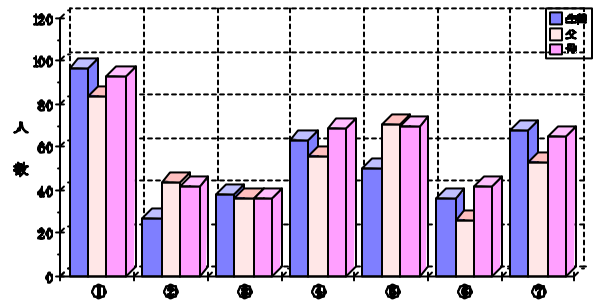
他人と比較される場合、その内容は多くの場合が 欠点・短所だろう。これらが嫌なことなのは理解できるが、「昔の自分と比較され、欠点を指摘されるのも嫌だ」という生徒もいた。過去の自分と比較するのは、他人と比較することなく自分の進歩を確認できる良い方法だと理解していたが、進歩が確認できない場合には嫌なものになってしまうようだ。ともあれ、欠点を注意されるのは誰でも嫌なもの。まず誉めて、しかる後に注意する。これが効果的なやり方だと言われている。

その他としては、生徒からは「欲しいものの意見の違い」「自分の秘密のことをいわれる」などがあつた。後者は、NHK朝の連ドラのように日記を読んだりしているのであろうか。子どもでもプライバシーは慎重に扱わなければならない。ところで、子どもは「留守中に部屋に勝手に入るな」と言う。これにはみなさん、どのように対応しているのでしょうか。

また「部活の試合でのプレーについて、とやかく言われる」というのもあつた。子どもたちは、「試合を見に来ないでほしい」とよく言うが、こんなことを嫌がっているのかも知れない。

保護者からは「家事の手伝い」「電話の使い方」「礼儀・言葉遣い」「時間を守ること」などが指摘されていた。選択肢に採り入れるべきであつた。

【図1】注意の内容



(2) どのような言葉にムカつきましたか。三つ選んでください。

突き放した言い方、決めつけた言い方は不評 大人の言いなりは、楽ですか？

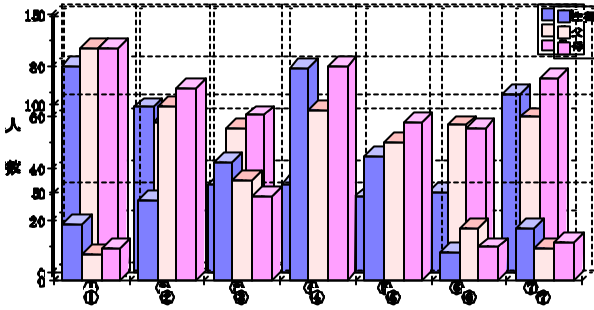
やる気はあるのか、勝手にしろという突き放すような言葉は、嫌なものだ。 どうせあんたは～という決めつけた言い方も不評である。

【表5】注意の言葉

	生徒	父	母
やる気はあるのか。	80	87	87
勝手にしなさい。	64	58	51
大人の言うことは聞くもんだ。	34	56	61
まだ子どもなんだから。	34	35	26
いま我慢をしておけば、将来よいことがある	29	28	29
どうしてなの、はっきり答えなさい。	31	57	56
どうせあんたは～なんだから。	69	60	75

～には、「まだ子どもなんだから、大人の言うことを聞いておけ」という言い方が並んでいる。こういう言い方をされると、子どもとしては反論できないだけに余計にムカつくのだらうと思われた。「いま我慢をしても

【図3】 注意のされ方



将来報われる保障はないじゃないか。だから今だって楽しみたい」という主張だ。しかし数は少なかった。とくに 大人の言うことは聞くもんだでは、子どもと保護者では開きがある。保護者ほどには嫌だと思っていない。ということは、大人の言うことを聞くことになっているのだろうか。「指示待ち人間」をしているのだろうか。そして、大人の言うとおりにや

って失敗したって、わたしの責任ではないと居直るのだろうか。進路の決定に際して、無意識のうちに、このような思考パターン・行動パターンをとるのかどうか、気になるところである。

しかし、～ は同じような内容である。そこでこの三つを加算すると、生徒 :97、父 :119、母 :116となり、結構な数になる。それでもやはり、保護者の方が敏感に反応しているように思えるのだが。

その他としては、生徒から、「勉強しろ」「揚げ足とるな」「昔は～だった、やりたくてもできなかったんだから」という言葉が、保護者から、「イヤミったらしい」「早くしなさい」「すぐやりなさい」「将来のことを考える」「勉強などそんなにしなくて良い」などがあつた。

(3) どのような注意のされ方にムカつきましたか。三つ選んでください。

「繰り返しての注意」には親子一致でムカーッ！！！！
「頭ごなし」には親の方が反応？？？

【表6 注意のされ方】

	生徒	父	母
たたかれたとき。	32	15	18
頭ごなしに言われたとき。	46	99	109
言い分を聞いてもらえないとき。	67	57	48
同じことを何度も言われたとき。	120	96	121
取りかかろうとする矢先に言われたとき	70	78	90
正論で責め立てられ、逃げ道がないとき	16	30	19
ストレス発散にしか見えないとき。	30	18	22

大きな差が出たのは、頭ごなしの注意。生徒は保護者ほどには嫌だとは思っていないらしい。それとも、もうなれてしまっているのだろうか。

同じことの繰り返しは、ダントツの数を示している(父親だけ少ないのはなぜか)。(2)に「何度同じことを言わせれば気が済む

んだ」とそのものズバリの言葉があつた。取りかかる矢先の注意も多い。この辺は親の精神状態も大いに影響していそうだ。

正論は、「自分が努力しないからでしょ。塾に行ってもできるとは限らないんだから」という言葉に対応している。自分の努力が十分でないことを、子どもは自分でも重々承知している。努力ができない自分を不甲斐ないと思っているところへ、このように迫られると、ま

さに凶星であるがゆえに反論できず、自分にますます腹が立つというところだろう。大人の世界でも「議論をするときには相手に逃げ道残しておけ」といわれる。子どもにも同様の配慮が必要だろう。

体罰の問題

たたくが意外に少なかった。いわゆる「愛のムチ」として学校での体罰を容認する意見が大人には多い。少ないながらも親子で倍近い開きが出たのは、このような傾向の現れであろうか。子どもでも、「クドクドいわれるよりさっぱりしてよい」という意見がある。その割に少なかったのは、実際にもたたいてはしないのだろう。中学生は、もう言葉でわからせる時期だからたたかないのであれば、健全な傾向である。しかし、体力的にかなわなくて、たたきたくてもたたけないという親が、たたくことを教員に期待しているとしたら、ナンセンスである。

ちなみに懲戒(こらしめ)としての体罰は、学校教育法によって一切禁じられているし、体罰に教育効果はないというのが教育心理学の定説である。

子どもの行為の背後にあるもの

言い訳を聞いてくれないも、頭ごなしに通じるところがある。保護者にすれば、間違ったことをしたんだから言い訳を聞く必要はないと思うだろう。でも子どもにすれば、やったことが悪いとわかっているのに、言い分を聞いてほしいのだ。大人は子どもの行為をその善悪だけで判断してしまいがちである。やってしまったことに対してけじめを付けさせるのは当然だが、それと同時に、その行為の背後にある子どもの気持ち、なぜそんなことをしたのかという気持ちを聞いてやることも必要である。

このごろの「いじめ」では、その手段として万引きなどの違法な行為を無理強いする場合もある。こんな時、行為だけを見て叱っても、子どもは大人不信を増すばかりである。

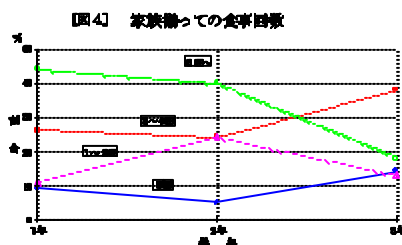
4 あなたの家では、この一週間で家族そろっての夕食は何回ありましたか。

親子の対話というと、一日の出来事をそれぞれが話しているホームドラマの夕食時のシーンが思い起こされる。それを念頭においての質問である。

学年が上がるに連れて、家族揃っての回数は減っている。これは、進学のための塾通いが増えるからであろう。でもこの塾通いが、その当否は別として、送迎の車中で、新たなコミュニケーションを作り出せそうに思える。

【表7】夕食の回数

	1 年	2 年	3 年	全 校
0 回	9%(5人)	5%(3人)	14%(8人)	10%(16人)
1～2回	26%(14人)	24%(13人)	38%(21人)	29%(48人)
3～4回	11%(6人)	24%(13人)	13%(7人)	16%(26人)
5回～	44%(24人)	40%(22人)	18%(10人)	34%(56人)



5 <共通>あなたは、自由に過ごして良い時間が一日与えられたら、何をしたいと思いますか。

「最近の中学生は疲れている」とよく言われる。授業が終わって部活をやり、週に二日は塾に通う。日曜日にも部活があれば、一日中ゆっくり過ごせるのは、第二・四土曜の二日だけ。そんな生活をしている生徒にこの質問をしてみた。ついでに保護者にも。

まず生徒。「寝ていたい」「ゆっくりしたい」「のんびりしたい」というのが、圧倒的多数であり、内容としては「ゲームをする」「音楽を聴く」が多く、「友人と遊ぶ」も結構あった。

保護者も、ゆっくり・のんびり派が多数。過ごし方としては、自分のために時間を使う方と、家族のために時間を使う方が半々くらい。「家族とゆっくり話をする」という父親、「一日だけ独身に戻りたい」という母親が印象に残る。

6 <生徒>親・保護者などの大人をみて、「さすがだな」と感じたことはありますか。それは、誰のどんなところですか。

約6割の生徒が記入。「働く姿・仕事をしている姿」「家事をしている姿」「おいしい料理を作ってくれる」「家族に気を配ってくれる」「相談にのってくれる」などが多く、日常生活の中で大人をとらえている。「聞いたことに、わかりやすく答えてくれる」というのも。知識欲の旺盛な中学生にとっては、生き字引のような親は頼りになるのだろう。それとも、自分で調べるのが面倒だから、重宝しているのだろうか。「辞書を引け」「事典を見よ」と言うところにはそんなわけが隠されているかも。

特別な体験としては、「プールで溺れるところを助けてもらった」「昔の辛いことを話したら、涙を流しながら聞いてくれた」というのがあった。「先生と話している時の父」というのも。頼もしく見えたのであろう。

おわりに

中学校の行事には保護者の姿が少ない。だが、子育てへの関心が乏しくなったわけではあるまい。子どもが親離れをしていくことから関わり方がわからなくなること、親の職業人としての職責が増してくることなどのせいであろうか。また極端な例であろうが、親にとって都合の良い限りで子どもを愛する親もいるという。そういう親にしてみれば、親の言うことを聞かない子どもは見放すことになるであろう。

ともあれ、中学生は親離れをはじめ。しかしそうだからといって、親が不要になるわけではない。親離れ＝自立は、他方に安定した依存関係＝親子関係があつてはじめて達成できるものである。だから中学生という時期だからこそ、子どもは親との信頼関係＝きずなを必要としているとは言えないだろうか。

これまで子どもは、保護され、導かれる存在であると理解されてきた。確かにそういう面もあるだろうが、大人に優る感受性や考え方を身につけていることもまた事実である。そして6で

みたように約6割の子どもたちは、大人を評価している(尊敬ではないけれど)。だから、「説き伏せてやろう」という姿勢ではなく、対等な人格として、「ともに考えよう」「判断しやすいように、問題点を整理してやろう」という姿勢で臨めば、対話は広がり、かつ深まるものと思われる。その中で、互いを見つめ直し、刺激し合うこともできるであろう。こう考えると、子育てとは、まさしく**育ち合い**であると言えよう。

設問・集計・講評ともに拙いアンケートであった。次の機会には、改善したいと思う。このデータが、いろいろな場において、議論の素材になれば幸いである。